広報 なりた 新生成田の創造

「古巣はさびても　小鳥はかよふ　昔忘れぬ屋根の下　三重」と刻まれた鈴木三重吉文学碑と副碑（成田山公園）

成田歴史玉手箱

●56回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

寄贈された鈴木三重吉資料

里帰りした成田時代の遺品

若かりしころの鈴木三重吉

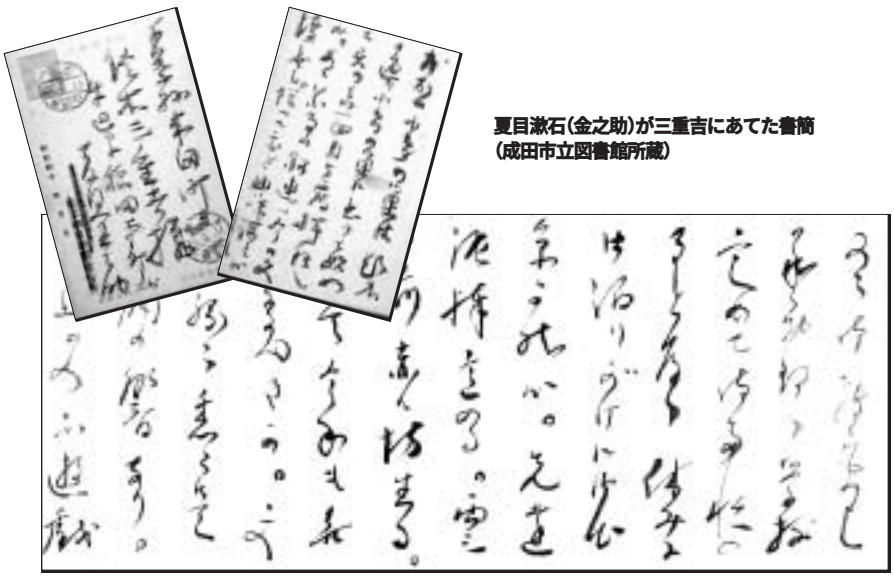
平成6年3月4日、「自筆原稿ゆかりの成田に」（読売）、「第二の故郷成田市へ」（東京）、「遺族が成田市に寄贈」（千葉日報）などの見出しで、新聞各紙が遺品寄贈のニュースを掲載しました。この遺品とは、日本児童文学の発展に大きな役割を果たした作家・鈴木三重吉の関係資料で、長男鈴木珊吉（さんきち）氏より成田市へ寄贈されたものです。

鈴木三重吉は明治15年広島に生まれ、東京大学在学中、夏目漱石に傾倒し作家として活動を歩み始めます。成田との縁は、卒業後の明治41年10月から44年4月まで旧制成田中学（現在の成田高校）へ教頭兼英語教師として赴任したことでした。三重吉26歳から29歳のときで、わずか2年6カ月の間ではありましたが、代表作の一つである「小鳥の巣」を執筆。当時の国民新聞（東京新聞の前身）に連載され、小説家としての地位を築き上げました。時の校長石川照勤（しょうきん）成田山新勝寺貫首は、作品完成のために5カ月間の休職を認めるなど援助を惜しみませんでした。一方、三重吉は「十箇月の間、それこそ血の出るやうな苦痛に鎖され、終には、作が終わると同時に狂人にでもなりはしまいかと自分ながら怖しかった程」と後に回想しています。それだけ情熱を注ぎ苦心して書き上げた作品だったのです。

寄贈された資料はまさにこのときのもので、推敲に推敲を重ねた「小鳥の巣」の自筆原稿1,151枚、それが掲載された国民新聞の原本、夏目漱石や高浜虚子との書簡など、成田時代の業績を知ることのできる貴重な品々です。成田市立図書館に保管されているこれら資料の詳細については『成田市史研究』20号の「鈴木珊吉氏寄贈 三重吉関係資料について（山本佗介（わびすけ）氏）」に書かれています。

成田を離れその後数多くの小説を発表した三重吉は、長女の誕生をきっかけに童話の世界へ。大正7年、童話童謡雑誌『赤い鳥』を創刊。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、北原白秋の「からたちの花」、西条八十の「カナリア」などの作品はこの雑誌に発表されたものです。

このような三重吉の功績に対し有志らが碑の建立を計画し、市制施行40周年にあたる平成6年6月、成田山公園内の一角、通称桜山に文学碑が建てられました。



夏目漱石（金之助）が三重吉にあてた書簡（成田市立図書館所蔵）

編集後記

誰もがホッとする年末年始の休み。ところが定期発行の広報紙作りにとってはこれが大敵。休みの前後に大変なしわ寄せが来るのです。年末には1月1日号・15日号のほかに、2月の分まで作り始める始末。しかし、早く作ると後から急に入る記事に一苦労。本号10ページの石油ストーブの記事などまさにこれ。12月中旬にはほぼ出来上がっていた紙面を作り直してどうにかセーフ。それと年末年始は学校などの取材がアウトですから長い休みも痛しかゆしです。

広報なりたは再生紙（古紙配合率100%・白色度70%）を使用しています。